

# 平成28年度文学研究科修士論文要旨

## 『正法眼蔵』「有時」の巻における「存在と時間」について

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅰ)専修 石川 治

### 第一章 仏教に於ける有(存在)と時(時間)について

第一章では、仏教における時間と存在の考え方について、初期仏教から大乘仏教までの流れを見る。初期仏教における時間論・存在論、『中論』における時間論、そして大乘仏教における時間論・存在論の四節に分けて論じる。

まず仏教以前のインド思想において、時は「死」と結びつけて考えられており、無常観、刹那性を有するものとされた。初期仏教、特に南伝アビダルマ仏教では時を主観的な体験時間と捉えることによって、継時性としての常識的な時間だけではなく、刹那、相続、世といった考え方が生まれた。また十二文縁起を時間の継時性から見る考えは、一心刹那縁起によって同時性へと統合された。一方北伝アビダルマ仏教(有部)においては縁起における時間の継時性と同時性は明確に区分されたが、同時性は時間の作用性に變化し、有部の存在論へと繋がる要因となった。

説一切有部において存在は、自性を有する実有と、自然的存在などの仮有とに分かれる。自性を有する法体は恒有(実有)であるが、作用、縁、性類を媒介して變化する。また「世」は作用によって分位たる過去・現在・未来の「三世」になる。

次に『中論』においては有部の三世実有法体恒有を論駁しており、時間論としては、

①過去・現在・未来の三世は独立した実有・自性ではなく、相依って成立している無自性である。また、存在によって時が把握されるのであって、存在を離れて時は有り得ない。

②過去も未来も動きの無い非現実的な世界であり、持続的な「去る働き」によってのみ現在が認識できる。要するに、動いている今この時という現実があるだけ。

最後に、大乘仏教における時と存在については、『華嚴經』「生起品」における考え方、特に「一即多」時間的に云えば一念の中に永遠を見、空間(存在)的には一点の中に全世界を包み込む、と云うことに尽きるのである。具体的には『華嚴五教章』にあるように、「過去劫が未来劫に入る」とか「未来劫が過去劫に入る」というような相即渾融の立場は、まさしく「過去と未来を呑み込んでいる現在」「永遠の現在」を指しているのである。

### 第二章 『正法眼蔵』「有時」の巻に於ける時間論について

第二章は『正法眼蔵』「有時」の巻の全文解釈を試みたものである。解釈に当たって、第一章の仏教における時間論が大いに参考になるのではないかと、思っ進めて来たが、参考になったのは華嚴思想くらいであった。

構成としては、本文の流れに沿って、有時とは何か(起)、有時の而今(承)、経歴の功德(転)、礙は礙をさえ礙をみる(結)とした。

まず「有時とは何か」、やはり「修行しているわれ」と尽有尽界(存在)・尽時(時)の関係性であると思うのである。『中論』においては、時と存在について次のように説かれている。

つまり、時は存在と同時にある、或いは存在によって時が把握される。よって存在を離れて時は有り得ない。その存在も縁起によって、相依って成り立っているのであり、実有ではない。当然時も実有ではないのである。

以上から、「時すでにこれ有なり、有はみな時なり」という有時の定義の意味は、諸行(存在)は時として変易する、つまり諸行無常であり、存在も時も実有ではなく、相依って成り立つもの、つまり因縁所生・諸法無我を表している。『聞書』や『抄』で云っているように「仏の世界」そのものを表現したものであると考えられる。

次に「有時の而今」であるが、「有時」の本文で「かの上山度河の時、この玉殿朱樓の時を吞却せざらんや、吐却せざらんや」は『華嚴五教章』の「或過去劫入未来劫、未来劫入過去劫」つまり、過去の中に未来を含み、未来の中に過去を含んでいることを表しているのであり、そしてその過去と未来を呑みこんでいる現在、つまり有時の而今を表しているのである。結局、「有時の而今」とは、融通無碍な仏の世界に於ける時間であり、それは一時が尽時で、過去と未来を呑みこんでいる現在、そしてその現在が現在として相続していく、つまり、永遠の現在を云うのであろう。

そして「経歴の功德」は種々の展開があるが、結果として経歴には二通りの在り方、或いは作用性がある。一つは常識的な時間である継時性としての去來の相、もう一つは同時性の無去來の相である。この同時性は、因果同時としての「修証一等」もあるし、「道環して断絶せず」の行持道環もある。行持現成の「いま」が「有時の而今」であり、その「有時の而今」も刹那生滅が相続している、同時性の無去來の相なのである。

最後に「礙は礙をさえ礙をみる」は、最終的に事事無礙の世界を現していると思われる。

これまで述べられてきた「有時の而今」永遠の現在というものは、事事無礙法界において顕現されるものであり、その事事無礙法界は障礙して相容れない事事が却って其の障礙を媒介として事事無礙となる世界なのである。まさしく道元禪師が描いた「有時」の世界と言えるのではないであろうか。

## 日泰寺の創建と覚王山商店街の展開

文学研究科宗教学仏教学専攻 宗教学宗教学史学研究(1)専修 天 雨 清 弘

本論では覚王山地域における展開を考察する。覚王山地域は日泰寺、八十八ヶ所霊場、覚王山商店街など、特色のある地域である。覚王山地域がこのような地域になった経緯をまとめ、その要因を考察するにあたり、当事者たちが記録した文献、当時の新聞や雑誌など歴史資料を使用し、ならびに現地にて聞き取り調査を行った。

日泰寺の建立の歴史をさかのぼると、1898年のインドのピブラーヴァーにおける真骨発見に始まる。イギリス政府は真骨をタイへ送り、タイは送られた真骨を周辺仏教国へ贈与した。その話を聞いた駐在タイ公使の稲垣満次郎は日本への下賜を打診、すぐさま日本への下賜が決まり、日本仏教界が真骨受け取りの準備を始める。日本仏教界は真骨下賜を望み、使節団選出に7宗派から各1名と決めしたが、奉迎使節団の資金問題もあり選出した宗派は4宗派のみと足並みがそろわなかった。1900年に下賜された真骨は京都の妙法院に奉安され、永久奉安地の選定が行われた。ここでも各宗派の足並みがそろわず選定までに仮奉安から2年も経過した。永久奉安地の選定に、名古屋と京都が最終候補となり、投票会議に集団欠席など問題が起こりながらも、1902年に名古屋が選ばれた。土地の寄進、建設費用、大菩提会の負債の支払いなどを行った田代村の功績が大きい。1904年に日泰寺完成、1918年6月11日に奉安塔に真骨が永久安置された。

日泰寺が完成し、行事にはタイからの来賓を迎え大々的に行われていたが、名古屋市の東端に位置する関係上、行事以外に集客が見込めなかった。そこで南鍛冶町先達、山下圓教が発起人となり、四国八十八ヶ所霊場のミニ版と言える霊場を覚王山に作る計画が行われた。四国霊場の許可があり、1909年に日泰寺山門前に第一札所霊山寺が完成、その後日泰寺周りに他札所も次々に作られた。全札所が1km四方内で回れる手軽さ、鉄道開通により交通の便が良くなったこと、毎月21日に弘法縁日が行われ、各札所で菓子配りにより子供たちが来るようになったこともあり、臨時電車が満員になるほど人々が来るようになった。覚王山霊場の発願書に世話人と名を連ね、八十八ヶ所霊場に貢献した伊藤萬藏は自身の名のもと、

1万の石造物寄進を目標に多くの霊場に石造物を寄進した。自身でも霊場を開き、亡くなる近くまで覚王山霊場をはじめ、全国に影響し続けた。

完成した日泰寺は、資金調達がままならず予定していた立派な建造物ではなかった。日本最大級の梵鐘も、鐘楼が作られる前に太平洋戦争の金属提出の対象とされ、1日だけ鳴らされて壊された。空襲被害はなかったが、戦後不況により厳しい運営だったが、古川為三郎はじめ、愛知を代表する経済人が信徒代表となり、彼らの活躍により食糧や資金提供、寄付金が集まり、日泰寺建設から約80年後に本堂等の建て替えが行われた。耐久性、維持コストが優れた鉄筋コンクリート製に作りかえられ、外観は伝統的日本建築物となった。1985年11月15日によく梵鐘と鐘楼が完成し、日泰寺は現在のような姿となった。日泰寺常任委員である鷲見弘明と代議士の江崎真澄の活躍により、日泰寺にラーマ5世の像が作られ、日泰寺は日本とタイの交流のシンボルになった。

覚王山交差点から日泰寺山門までの日泰寺参道に覚王山商店街があり、覚王山の活気の一翼を担っている。商店街の始まりは日泰寺建設ごろである。客が集まるのは毎月21日の弘法縁日か日泰寺の行事がある日に限られ、商店街の売上は低迷していた。現在の活気ある商店街になったのは、1996年に運営コンサルタントを入れてからである。日泰寺と弘法縁日の客層は年配が多いため、若者呼びつつ覚王山のイメージを崩さないようにレトロ、エスニック、アート&クラフトのイメージを前面に出した。参道ミュージアムや覚王山新聞、覚王山マップなどアート面に力をいれ、おしゃれなイメージづくりにも取り組んだ。祭りを年3回に増やし、覚王山のイメージにあった出店を外部からも招くことで、広い年齢層の客を増やした。2008年には愛知県ブランド商店街に選ばれ、覚王山は観光名所となった。

以上の歴史的経緯から、日泰寺を支えてきたのは、名古屋の経済人たちの活躍であることがわかる。それだけでなく、日泰寺周辺に展開する覚王山霊場や弘法縁日、さらに各季節祭やイベントも、日泰寺と覚王山商店街を支えているのである。

# 毛沢東思想の形成と時代的特色

——矛盾論, 実践論, 持久戦論などと関連させて——

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(II)専修 齋藤誠徳

本修士論文においては毛沢東が受けた影響について、人物、その時代に起きた事件などを絡めながら明らかにした。毛沢東についての書物は多く存在している。そのため、毛沢東が一貫して変化させなかった思想は存在するのか。毛沢東は人生の中で人物、事件のどのような部分に一番影響を受け、どのような思想が根本となっていたのか。以上のことを中心にしながら論じた。影響を受けた人物としては楊昌済、陳独秀があげられる。楊昌済は中国の未来を若者に託そうとした。その中で毛沢東は全ての行動を社会の利益のためにすること、自己の主張は決して犠牲にはいけないことを学んだ。陳独秀は農民を第一と考え、その農民たちが立ち上がることを待った。毛沢東はこのような考え方に基づきながら、農民運動について視察、考察を行なった。

第一章では、毛沢東の原点でもある師範生時代を中心として毛沢東が影響を受け始めた時代を明らかにしていく。農民の子供として生まれた毛沢東はどのような家庭に生まれ何をきっかけとして中国国内の事情に興味を持ち始めたのか。毛沢東の根本となった部分に対して焦点を当てた。

第二章においては、楊昌済についてである。楊昌済は初期の毛沢東にとって非常に大きな影響を与えた人物として知られている。そんな楊昌済がどのような考えを持っていたのか。次のようなことに注目しながら毛沢東思想との共通点と差異について明らかにした。

第三章においては、陳独秀についてである。陳独秀は楊昌済と並んで毛沢東との関係が深い人物である。彼は毛沢東と同じように農民を中心として考えていた。陳独秀が考えていた農民運動問題はどのようなものだったの

か。陳独秀と毛沢東の違い、また共通性と差異について注意しながら論じた。この農民に対する考え方は、第五章の持久戦論に関連してくるものであり、楊昌済、陳独秀の二人の存在が毛沢東の根本を形成するきっかけになっていた。

第四章においては、実践論、矛盾論について明らかにした。この二つは持久戦論の前年に出されたものであり、持久戦論の要素がここに現れている。物事には必ず矛盾が存在しそれを認識することを矛盾論と呼ぶ。そしてその矛盾に対して様々な角度から見ながら細分化していく。このように繰り返しながら問題を解決していくことが実践論である。

第五章においては、持久戦論について明らかにした。なぜ毛沢東は日本に対し持久戦論を論じ、それによって勝ると主張したのか。各種問題を様々な角度から考察し、細分化しながら認識していった。そして戦争の中で最善な方法を選択し中国を勝利へと導いたのである。実際に戦争中に取られた戦略、戦術を交えながら明らかにした。

要するに毛沢東の思想とは、抵抗、分析、細分化を常に繰り返しながら変化し続けていく現実的な思想であると考えられる。持久戦論を述べた時においてはこれを行っていることが分かる。日中戦争ではこの方法を駆使することにより勝利が難しいと考えられていた日本との戦争に持久戦で勝利したのである。このように毛沢東は自身の考えの中に、人物や出来事など多くの思想を取り入れながら実践論、矛盾論、持久戦論に見られるような独自の思想を形成した。

# 中世における銭貨の流通について

——中世都市鎌倉を中心に——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究(Ⅱ)専修 森村知幸

本稿は、中世都市である鎌倉の出土銭について検討し、中世における銭貨流通の実態を探ることを目的としている。一括出土銭のような大量出土銭ばかりでなく、近年研究の重要性が指摘されている個別出土銭も資料として用いて検討を加えた。

第1章では一括出土銭と個別出土銭の先行研究をまとめた。これにより、一括出土銭に比べ個別出土銭の先行研究は少なく資料の集成・検討が必要であること、中世における銭貨流通の実態を探るため中世都市の一つである鎌倉における出土銭の分析が重要であることが分かった。

第2章では鎌倉遺跡群のうち101地点の概要と銭貨の出土状況について墓地、屋敷地・城館、町屋、幕府関連施設、寺社、集落毎に紹介した。また各地点で1㎡当たりの銭貨出土量を単位枚数として求めた。

第3章では鎌倉での銭貨流通について検討を加えた。遺跡の性格毎に銭貨の出土量を比較すると、屋敷地と町屋で銭貨の出土量が多く経済活動が活発に行われていたことが明らかになった。さらに、101地点を単位枚数でグループに分け、分布図を作成し、より詳細な経済活動の場を明らかにしようと試みた。その結果、単位枚数が高い地点が集中する今小路一帯が、鎌倉における経済活動の中心地であったと推測した。次に、層位毎で良好な資料が残っている地点を取り上げ、時間的な銭貨流通の変化を検討した。各層に瀬戸製品や常滑製品の編年を基に年代を与え、銭貨の出土量を調べた。鎌倉では13世紀後半から14世紀前半にかけて銭貨の流通量がピークとなり、鎌倉幕府滅亡を画期として14世紀中頃以降は流通量が減少することが分かった。銭種組成については、101地点5830枚の銭貨を調べ北宋銭が主体であることが分かり、一括出土銭と同様の組成であった。ここで15世紀中頃までは都市として機能していたとされている鎌倉で、中世後半の主要銭貨として登場する洪武通宝は4枚、永楽通宝は8枚と非常に出土量が少ないことが問題として浮かび上がったため、第4章と第5章で検討を加えた。

第4章では、洪武・永楽通宝の流通時期について検討するため、全国の主要遺跡と一括出土銭を北海道・東北

地方、関東地方、北陸地方、東海地方、近畿地方、中国・四国地方、九州地方毎に紹介した。

第5章では、主要遺跡と一括出土銭をそれぞれ分類し洪武・永楽通宝の流通時期について検討を加えた。

主要遺跡は、衰退・廃絶年代によってA類、B類、C類とに大別した。A類は、衰退・廃絶年代が15世紀中頃の遺跡で草戸千軒町遺跡、普正寺遺跡である。B類は、15世紀末の遺跡で安濃津遺跡、元島遺跡である。C類は、16世紀末以降の遺跡で浪岡城跡、大光寺新城跡遺跡、朝倉氏一乗谷遺跡、堺環濠都市遺跡、兵庫津遺跡、湯築城跡、大友府内町遺跡、博多遺跡群である。

一括出土銭は、最新銭の上限年代や容器の年代などから求めた推定埋蔵年代によってa類、b類、c類、d類に分類した。a類は、推定年代が14世紀後半～15世紀前半の事例で志海苔館跡一括出土銭、掛馬一括出土銭、社口田遺跡一括出土銭である。b類は、15世紀前半～中頃の事例で堂坂遺跡一括出土銭である。c類は、15世紀中頃～後半の事例で武蔵府中一括出土銭である。d類は、15世紀後半以降の事例で久原一括出土銭、岸田一括出土銭、大門一括出土銭、一乗谷朝倉氏遺跡一括出土銭、中屋遺跡一括出土銭である。

これらの事例で、それぞれ洪武・永楽通宝の割合を出現率として求めた。A類のa類、b類は出現率が低く、B類のc類は出現率の高い事例と低い事例があることから15世紀中頃になると流通量の増加が始まると推測した。そしてC類のd類ではほとんどの事例で出現率が高くなることから、15世紀後半以降は全国的に流通量が多かったことが明らかになった。

以上のことから鎌倉で洪武・永楽通宝の出土量が少ない理由は、流通量が増加する時期が原因となっていると思われる。すなわち、15世紀前半は洪武・永楽通宝の流通量が全国的に少なかったために鎌倉でもほとんど流通しなかった。そして、流通量が増加する15世紀中頃以降、鎌倉は都市としての機能を失い農村化し、経済活動も活発に行われなかったため洪武・永楽通宝の出土量が非常に少量であったと考えられる。しかし、洪武・永楽通宝の流通量の増加時期が初鋳年から半世紀以上もの期間があり検討の必要があるため、これを今後の課題とした。

# Knowledge Development of English Derivational Morphology in Lower-Intermediate Japanese Learners of English

文学研究科英語圏文化専攻 英語英文学研究(1)専修 岩本 勇人

## The object of this study

This study investigated the phonological and morpho-syntactic knowledge of derivational English words possessed by low-intermediate Japanese learners of English. The motive for choosing this topic is that learners seem to be able to increase their English vocabulary by gaining control of affixes because “a large proportion of words coming from Latin or Greek make use of affixes (Nation, 2001).”

## Background of this study

Most English content words can change their form by adding prefixes and suffixes. These affixes are divided into two types: inflectional and derivational. The inflectional affixes in English are all suffixes, which include *-s* (plural), *-ed*, *-ing*, *-s* (third person singular), *-er* (comparative), *-est* (superlative). On the other hand, derivational affixes in English include prefixes and suffixes. Most of the derivational suffixes and a few prefixes change the part of speech of the word they are added to. Some of the affixes also change the meaning of the word (e.g., *tie / untie*; *care / careless*).

Tyler and Nagy (1989) classified derivational morphology into three types: relational, syntactic and distributional. Relational knowledge means recognizing the relationships between root forms and derivational knowledge. Syntactic knowledge is understanding which suffixes mark words for syntactic category. Distributional knowledge has to do with the constraints on the connection of stems and suffixes. For example, the word *playful* exists whereas the word *playness* does not exist. This study focuses on relational and syntactic knowledge, but not on distributional knowledge because there are few materials of distributional knowledge.

Carlisle (1988) divided transformation between the base words and derived forms into four types when the base words are attached to suffixes: No Change (NC—Neither the spelling nor the pronunciation of the base changes in derived forms.),

Orthographic Change (OC—The spelling but not the pronunciation of the base word changes in the derived form.), Phonological Change (PC—The pronunciation changes in the shift from the base word to the derived form without any changes in spelling.), and Both Change (BC—Changes occur in both the spelling and the pronunciation occur in the shift.).

## Research questions

Considering the previous studies, the following research questions (RQ) were addressed:

RQ1: Is it easier for Japanese learners of English to acquire relational knowledge than syntactic knowledge?

RQ2: Are there any relationships between English proficiency of Japanese learners and their relational knowledge?

RQ3: Which type of syntactic knowledge is more difficult or easier, NC, OC, PC or BC?

RQ4: Which type(s) of derivational knowledge (NC, OC, PC and BC) can contribute most to the differences in reading performance?

RQ5: What suffixes is it difficult for Japanese learners of English to acquire?

## Tests and results

Three kinds of test (relational knowledge test, syntactic knowledge test including 4 types of transformation, and suffix knowledge test in the nonwords) were conducted. The results indicate that relational knowledge is easier than syntactic knowledge, and that more proficient learners have got more derivational knowledge or more vocabulary. One-way ANOVA between subjects proved that BC was different from the other types, and the most difficult to acquire. Correlational analysis clarified that reading proficiency was fairly closely related with syntactic derivational knowledge, especially PC type and BC type. As a result of error analysis, it became clear what suffixes they have not been exposed to in English learning.

# A Discourse Analysis of Dialogues in Japanese High School English Textbooks

文学研究科英語圏文化専攻 英語英文学研究(Ⅲ)専修 宋 忠 杰

## The object of this study

This thesis examines the authenticity of dialogues presented in high school English textbooks published in Japan. The primary aim of the analysis is to find out whether dialogues in textbooks can help learners to use English as a means of communication.

In recent years, teaching English as a foreign language (TEFL) has become increasingly popular all over the world. The language is also taught as a second language (TESL) in the countries where it is used as the first language. In the latter case, teaching is intended especially for those who immigrate or come from other countries where their first language is not English.

In English language teaching, textbooks are acknowledged as very important resources. They are used at various levels of educational institutions, and some are highly evaluated and others are not. As is well known, some “bad” English textbooks may mislead learners into the belief that English cannot be used as a means of communication however long they learn it.

## Research method

Great varieties of English textbooks are published for Japanese high school students in Japan. Though they need to be authorized by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT), the teaching staff at individual senior high schools have the right to choose their own textbooks that they feel suit their envisaged students.

There are tens of major textbook publishers in Japan: Sansendo, Keirinkan, Tokyo Shoseki and the like. They are competing actively with each other to grab market share, and thus maintain the top market share of both “English Expression” and “English Communication” textbooks de-

signed for senior high school students in Japan.

For the present analysis, the author chooses ten leading English textbooks from Japan, and six from Cambridge University Press, which are on the same level with their Japanese counterparts. They are compared with each other in terms of *authenticity*, *imperfect contextual information*, *problem free*, “*can do*” *society*, *grammar teaching*, and *speech act* focusing on the language function of apology. All of the data and information are examined and categorized by page-by-page analysis.

## Results

This paper reveals that, in comparison with the six Cambridge University Press textbooks sampled for this research, dialogues used in English textbooks published in Japan have several drawbacks. They seem to be inferior in terms of the above-mentioned categories. Because of these problems, some serious Japanese learners of English may become aware that the dialogues they learn from their textbooks are not of much use when they stay in English-speaking countries.

There is one limitation to this analysis. The English textbooks analyzed in this paper are just a small number of the English textbooks published in Japan, and therefore fail to represent all the English textbooks available in the educational field. It is obvious, therefore, that further investigations into dialogues in English textbooks need to be carried out.

As a conclusion of this study, I would like to raise one question which remains to be answered in this thesis: How can dialogues in textbooks help learners to learn English as a foreign language? This question is important, and therefore must be dealt with in the future.

## 「シャーロック・ホームズ」と19世紀英国の社会と犯罪

文学研究科英語圏文化専攻 英語圏文化研究(V)-1専修 岩野祐里

イギリスの歴史を語る上で、19世紀から20世紀という時代は非常に重要な時である。それはイギリスの社会、経済、政治、外交、そして文学思潮などが著しく発展・変革を遂げた時期であるからである。イギリスは19世紀半ば世界各地に植民地を拡大し、植民地世界の富がイギリス本国、特にその首都であるロンドンなどに流入し、未曾有の繁栄を遂げたが、また犯罪も飛躍的に増大した。こうした社会を背景にした人々の生活や文化が変化し、その様子が描写された小説などは我々現代人の目にはとても魅力的に映る。それら小説のなかで、私は19世紀から20世紀にかけて書かれた推理小説、「シャーロック・ホームズ」を修士論文において取り上げた。「シャーロック・ホームズ」は、アーサー・コナン・ドイルによって1887年から1927年にかけて書かれた小説であり、長編4作、短編56作、全部で60作品のシリーズがある。作者ドイルが歴史小説の作家でもあったため、これら「ホームズ」小説は、その執筆期間である約40年間の大英帝国の社会・政治・経済・外交の様子を色濃く反映した小説ということになる。私は「シャーロック・ホームズ」作品をもとに、その背景となる19世紀から20世紀のイギリス社会、特にその当時人口の急激な増加によって郊外に拡大していった首都ロンドンの繁栄の陰に巣くう犯罪を考察した。

目次に沿って修論の内容を概略的に説明すると、第一章では前述したイギリスの帝国主義とホームズ作品の関

わりについて論じた。ホームズ作品では、インド、オーストラリア、アメリカ、南アフリカ等植民地で財を成した人々が本国イギリスで犯罪に巻き込まれる例がしばしばあり、こうした問題を中心に考察した。第二章ではイギリスの階級とホームズ作品の関わり、そして、19世紀から20世紀にかけての女性の社会的地位の変化に関わる犯罪がどのように描写されているかを考察した。ホームズ作品では上は王族・貴族から下は下層労働者まで登場し、当時社会に新たに進出し出したタイピストなど「新しい」女性も登場しているからである。そして、第一章、第二章の重点的な問題・内容が全部描写されている代表的な長編作品『バスカヴィル館の魔犬』を第三章において取り上げ考察した。この作品で、イギリスの古い貴族の館に伝わる魔犬伝説を背景に作中で描かれる「帝国主義」「階級」「女性」のテーマについて論じ、ホームズとドイルが当時のイギリスをどのように見ていたかをまとめた。

結論としては「シャーロック・ホームズ」という有名な推理小説が前述した19世紀から20世紀にかけてのイギリス社会を知ることのできる有力な資料となることを明らかにし、この作品が当時の現実社会をよく反映したものであることを明らかにした。そして、ホームズ作品は現代に生きる我々も当時の英国社会を楽しく観察しつつ、その時代も学べる小説であると論じた。